いちはし商店

「だれも入れてはだめよ」店のドアをスルスルと閉めて母がもて行った あ、たく、店員が出ばらっていたので母が注文の品をとりに行ったのだ セナセこ千ぐらいのたて長の

「いりこ」の入ったフクロを持ってもて行った

はじめて買物 家の中から店の子たちが

かり見ていた すると少しのスーツにソフト帽の男が店のドアをあけてはいって来た そして店を通り家へ入ろうとする

「だめ だめです」と手をひろげて通せんぼをした

すると男は店の出入り口にすわった 敵は

母屋を知っている ようやくて店員通路へ行き

又「だめだめ」と通せんぼをした その時店の

アがすきまかえって来た 「どうしたの」

男たしげに言った 「たけちゃん中へ入れ

てくれないんだよ」 「お父さんでしょ」と母が言

った 私はおどろいて男を見た 「これがお父

さんか」 もう一度スーツ姿の男を見た

そうだったのか 私の知っているお父さんは

いつも書物屋でうす暗い電燈で何かうんだり
かったりしている　それが欠点だったはず
とこれぜいたく高者の多いこと
父は工業研究所で高者をしたことはない
だったら個人のりの場をひらいたので
「のり」を販売することになった　高の学生はか
さ立が多い「学生」が多かってみる　雨が降
ったらお使いできない」ということらしい
その年にはいちばん高者とかいて多くと父が
言っていた

いちばん
平穏のんびりはぎっしだ　「いちばん」の中あもす
る　「近見」は近い　「バくばりをする」の風潮が
つもあって　近見高合
いたのかもしれない